

どんな職業か

百貨店や専門店における売り場のデザインや構成、商品特性を活かした陳列プラン、ウィンドウディスプレイのデザインと施工監理、店内演出など、場の目的にあった成果が得られるように視覚的なデザインを行い、商品を効果的に陳列、演出、表現する。

「ビジュアルマーチャンダイザー」あるいは「VMDコーディネーター」ともいい、プランニングから関わる人を「VMDディレクター」という。また、商品装飾、商品デコレーター、ショッププランナー、ディスプレイヤーなどと呼ばれることもある。

具体的な作業としては、発注者と打ち合わせをし、店舗のコンセプトに基づきデザイン構想を練り、ラフスケッチや模型を制作してイメージを具体化する。CADやイラストレーターなどのソフトを使い、図面プランや完成予定図を作り、発注者の了解を得て、平面図や立体図を作成する。出来上がった図面をもとに、施工業者に制作を依頼する。施工に立ち会い、イメージどおりに出来ているか確認し、必要であれば手直しを指示する。

完成したディスプレイはその前で客が足を止め、客が店舗に入り、商品が売れることにより、売上げ増に貢献するものとなる。

就くには

ディスプレイデザイナーとしてアパレル会社やディスプレイ専門のプロダクションに就職するには、ディスプレイデザイン、空間演出デザイン、スペースデザイン、ビジュアルマーチャンダイジング（VMD）、ディスプレイコーディネーター、インテリアスタイリストなどの名称の専攻がある各種学校や専門学校、大学などで様々な基本や応用を学ぶことが望ましい。

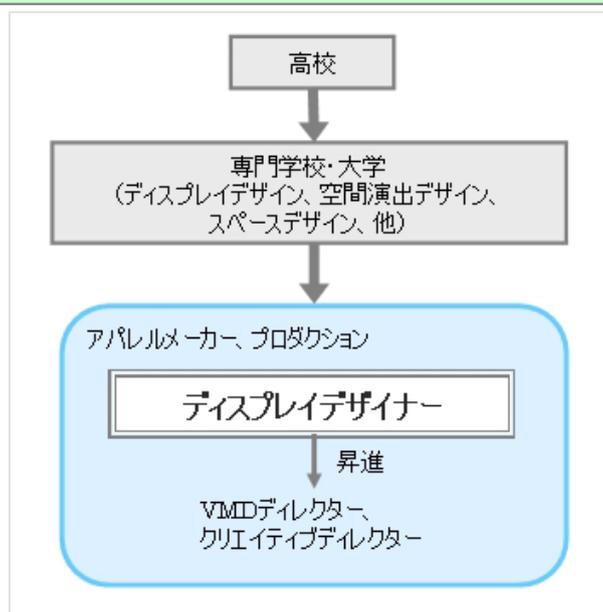
必要な資格は特にないが、国家資格である商品装飾展示技能士の資格を取得しておくことが就職には有利になる。

ディスプレイデザイナーになるには、基本的なデザイン力や表現力が備わっていることが最低条件となる。ファッションや流行に敏感でないと務まらない。テーマに基づいた今日的なイメージ表現ができ、伝えたいメッセージを演出し、共感してもらえることが必要である。

また、販売促進を目的とするため、対象顧客のライフスタイルや市場の分析などマーケティング関連、商品やファッションの関連など、広範囲な知識が求められる。

他の職種からの転職はそれほど多くないが、百貨店などの販売員が商品装飾展示のスキルを身につけてディスプレイデザイナーになることは少なくない。

就職した後は、アシスタントデザイナーとして数年の実務を経て、一人前のディスプレイデザイナーとして仕事を任されるようになる。その後、デザイナーとしての専門職を続けながらVMDディレクターやクリエイティブディレクターとなるか、デザイナーの専門職を離れてデザイン会社等の経営に携わる者もいる。



労働条件の特徴

ディスプレイデザイナーは、アパレル会社やプロダクションに所属するほかに、特に商品装飾や商品デコレーターと呼ばれる人は最初からフリーランスとして活動する人も多い。従業員として企業に勤務する場合は正社員が7割程度で、残り3割程度が契約社員と考えられている。

勤務時間はフレックスタイム制で、売り場での作業が閉店後や休日に行われる事が多いこともあり不規則である。残業時間も比較的多い。ただし、業界全体としては残業時間を減らす方向で取り組みが進められている。

ディスプレイデザイナーは専門職採用となり、社内において事務系の社員などとは賃金モデルが異なる。給与は本給と能力給で構成され、実績に応じて能力給の部分で個人差がつく。平均的な給与水準としては、事務系社員よりは高くなる。

日本はビジュアルマーチャンダイジングの先進国であり、日本の小売業者の海外進出に伴い、ディスプレイデザイナーの活躍の場もグローバルになりつつある。

参考情報

関連団体 日本ビジュアルマーチャンダイジング協会

<http://www.javma.com>

一般社団法人日本空間デザイン協会

<http://www.dsa.or.jp/>

関連資格 商品装飾展示技能士